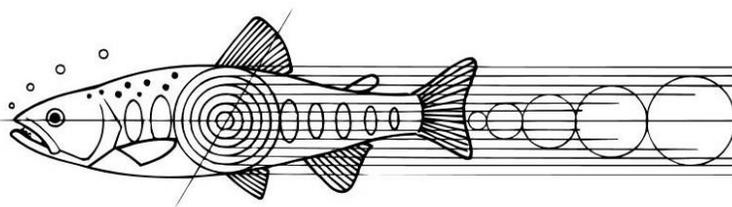


# news

長良川市民学習会ニュース



No.37

2022年6月27日

## — 目次 —

パンデミック（世界流行）は温暖化が原因？ 粕谷志郎 .....	1
情勢と活動報告 武藤仁 .....	1
（特集：徳山ダム導水路-2）	
愛知県民・名古屋市民の私が願うこと 田中万寿 .....	4
東濃と中濃の水道用水の現状と課題 富樫幸一 .....	6
徳山ダムと発電 近藤ゆり子 .....	8
長良川右岸に暮らして 粕谷豊樹 .....	10
追悼 野田知佑さん 平工顕太郎 .....	12
パネル展「よみがえれ長良川 2022」のご案内 .....	13
寄せられたお便り・メールから 山室真澄、小林収、真野匡美、神田啓一 .....	14
事務局から .....	17
よみがえれ長良川参加団体紹介「自然の権利」基金 籠橋隆明 .....	18

### 表紙の写真と伊藤孝司さんの紹介

表紙の写真を見て読者の多くの方が、「あっ、見たことがある！」と思われたと思います。そうです。「川は生きているか」（1998年岩波書店）の表紙を飾った伊藤孝司さんの作品です。郡上八幡にて1994年8月14日撮影。伊藤さんは、長良川・長良川河口堰を題材に数々のすばらしい作品を出されてきました。

1952年長野県生まれ、三重県在住。写真家ユージン・スミスが撮った「水俣」に大きな影響を受け写真の道を歩み始められました。水俣から広島・長崎へ。そして初めて「朝鮮人の被爆」を知ったことが『アジア』との出会いとなり、フォトジャーナリストとしての生き方を決められました。

以来、取材対象は日本が侵略したアジア太平洋地域へと拡大。韓国47回、朝鮮43回を含めアジア諸国へ約200回も通うことになりました。「空白」となっていた朝鮮民主主義人民共和国（朝鮮）では、水俣で有機水銀中毒を隠し続けた「チッソ」が、1927年日本の植民地支配のもと「朝鮮窒素肥料」を設立し、国策として興南（フナム）に世界最大規模の化学コンビナートを建設し多くの朝鮮人を過酷な労働に連行した歴史と現場を取材しました。

少年時代、過酷な労働で頭から硝酸を浴び全身大やけどを負い、労働者のストライキのたたかいによって治療を受けることはできたが右眼は失った伊昌宇（ユンチャンウ）さんの活動なども取材。映画『銀のスッカラ』として公開されました（TBS「報道特集」でも報道）。

いつも、伊藤さんの作品は、世界で起きる公害、環境破壊、権力の横暴に立ち向かう世界の人々を勇気づけています。

昨年、長良川市民学習会は、伊藤さんから「長良川にかかわる50点を超す作品」を譲り受けました。7月9日～13日に、開催するパネル展「よみがえれ長良川 2022」では、それらを展示させていただきます。また、7月10日（日）11:00～12:00同会場におきまして「水俣・長良川からアジアへ」と題してお話していただけることになりました。ご期待ください。

# 巻頭言 パンデミック(世界流行)は温暖化が原因？

長良川市民学習会 代表 粕谷志郎

パンデミックもほぼ出口となってきたようですが、皆様いかがお暮らしてでしょうか。

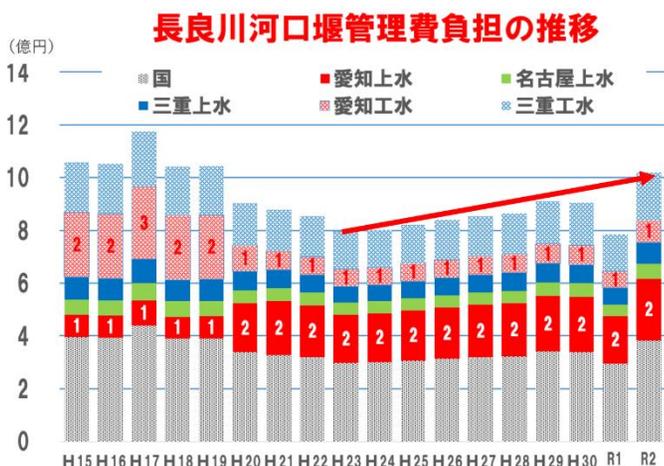
今回の新型コロナのパンデミックでは実に沢山の論文が発刊されました。よくこんな短期間で、ここまでのレベルの研究が出来たものだと驚かされるものも多く、世界の研究レベルの高さを見せつけられた思いです。最近では目下の流行ウィルスの研究は少なくなり、締めくくり的、包括的な論文が出され始めています。その中で、「気候変動が新しい動物の出会いとさらなるウィルスの流行を押しつけるだろう」という題名が飛び込んできました。有史前から、その時代に合った病原体が繰り返しパンデミックを引き起こしてきており、気候変動と関係があるのかなど不思議に思い読んでみました。

今後 50 年間で、ある哺乳動物から他の哺乳動物に感染が広がるウィルスの種類が 15,000 以上に及ぶだろうとするシミュレーションです。もし、2°Cの温暖化が進んだ場合、より涼しい場所への多くの哺乳類の移動が始まり、結果的にすでに人口密度の高い、インド、インドネシア、アフリカ南部などへ密集するだろう。その結果、初めて出会う動物が増え、お互いの持つウィルスを交換する可能性が高くなるというものです。特に、コウモリは哺乳動物の 20%を占め、飛ぶことができ、生息域を変えやすい。さらに、多種類のコロナウィルスの保菌動物でもあり、継続して調査してゆく必要があるということです。このように哺乳動物から人へ病原体が移ることをスピルオーバー (spillover: あふれ出す意) と呼びますが、今後、環境用語として多くお目にかかりそうです。

温暖化は海面上昇や風水害の増加など、ますます深刻な影響を社会にあたえはじめていますが、感染症対策も極めて重要な項目となってきているようです。10 年ほど前まではマラリアなどの病原体を持った動物の生息域が北上するので、日本でも熱帯性の感染症が増えるのではないかと、いう事でしたが、根幹を揺るがすようなスピルオーバーが待ち構えているようです。一国二国を襲う風水害と比べ、パンデミックは全世界を襲い、今回のコロナは全世界で 1,500-2,100 万人の命を奪い、1,000 兆円を上回る経済的損失もたらしたと試算されています。温暖化に対して莫大な経費をあがなわなければならない時代に突入したようです。

## 情勢と活動報告

長良川市民学習会 事務局長 武藤仁



前号 (36 号) 発行の 3 月 12 日以降の情勢と活動報告をします。

3 月 26 日、愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会主催の県民講座「長良川河口堰の現在の課題と最適運用について」が開催されました。同検討委員会が発足して 10 年。これまでの検討成果と今後の課題を明らかにするものです。

講演は「流域治水への転換とこれからの課題」と題して嘉田由紀子参議院議員がされました。報告は、検討委員である武藤がパンフレット「長良川河

口堰これから？」\*を使って行いました。

河口堰が運用されて4半世紀が過ぎました。漁業・環境被害は明らかです。利水目的の16%の水しか使われていない無駄な施設に、今後毎年10億円規模の管理負担がのしかかってきます。施設の老朽化は進みます。大きな負の遺産を、次世代に残すことになることになり。 「河口堰のこれから」を広く論議されることが今求められています。

\*パンフレットは、愛知県水資源課ホームページ <https://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/412100.pdf> からご覧いただけますが、よみがえれ長良川実行委員会は、広く市民に議論していただけるようは増刷し、普及しています。普及にご協力いただける皆様には無料でお届けしています。ご協力いただける方は長良川市民学習会事務局までお知らせください。

### 明治用水頭首工で大漏水事故

5月17日、愛知県矢作川の明治用水頭首工で未曾有の大漏水事故が発生しました。農業用水にとって一番大事な時にもかかわらず取水が不能となり、応急対策として川からのポンプくみ上げを行いました。被害が広がっています。本ニュース執筆現在、現場では取水口に水を導くように鋼矢板が川の中に打ち込まれ何とか平年並みの水を確保できるようになったようですが、洪水期でもあり危ない状況にあります。堰本体の下を水が貫通する大規模なパイピング現象が起こっているようですが実態は把握できていません。管理する東海農政局は年内の本復旧は難しいとしています。

この頭首工は1957年に建設されてから65年たつ施設ですが、老朽土木構造物の維持管理の難しさと重大さが改めて明らかになりました。

### 設楽ダム建設 事業費 800 億円増・工期8年延期

5月17日、国土交通省中部地方整備局は設楽ダム建設について事業費を800億円増額し3,200億円に、工期を8年延長して2034年にすると発表しました。当初想定していなかった地滑り対策などによりますが、もともとこのダムサイトは、断層や地層の状況からダム建設ができないところでした。



5月27日、「設楽ダム建設の建設中止を求め

る会」主催の建設現場見学会に参加しました。今まで多くのダム建設現場を見てきましたが、こんな酷い現場を見たことがありません。

左は計画ダムサイト上流側から見た写真です。つまりダム湖になるところ。彼方に見える穴が転流工（ダム本体工事にあたって必要な仮設迂回水路）の呑口。では、ダム湖に沈んでしまうのに、右岸のコンクリート三面張りの立派な水路は何のために造られたのか？

これは左岸斜面が地滑りを起こしそうなのが分かったので、補強しなければならなくなっ

た。そこでコンクリートと土と粘土を混ぜ、寒狭川を埋めたてて、その上に盛土して左岸斜面を補強するというのだ。その前段工事として右岸に水路をつくるという。摩訶不思議な水路工事なのです。水を貯めるために造るダム湖に盛土するというこの「貯水池斜面对策工」。いったい何なの？

左岸に見る鉄塔のように高い仮設道路は「付け替え県道工事」のためのものだが、これまた左岸斜面崩壊に備えて持ち上がった大「仮設工事」。こんな危ない弥縫策（びほうさく）。大丈夫？

なお、国交省はダム本体の基礎も必要な強度の地盤が予想より深いところにあることが分かり、さらに掘り下げる工事が必要となり掘削量は約101万m<sup>3</sup>から182万m<sup>3</sup>に、コンクリート打設量も104万m<sup>3</sup>から130万m<sup>3</sup>に

増えると発表しています。事業費の拡大は止まらないでしょう。

「中止を求める会」や専門家が基本的に問題にしているのは、この地域が工学的に有効な対策が取れない「深層崩壊」を起こす地質であるということです（ここは、危ないから電源開発がダム建設を断念したところ）。

翻って、長良川支流ですすむ内ヶ谷ダム建設。2019年ダム堤体右岸を掘削中、岩盤に予想になかった亀裂を発見し補強工事のために事業費増額を行っている。事業費260億円でスタートし三度にわたる増額で580億円となりました。工期も2025年に延期されました。まさに「小さく生んで大きく育てる」。これがダム事業の「常道」！

### 長良川下流域環境観察会

5月21日長良川下流域環境観察会を開催しました。雨雲が広がる下での観察会でしたが、計画通り観察できました。参加者は定員いっぱいの20名。初参加も多く、驚きと感謝の感想が寄せられました（16ページ参照）。



午前の河口堰下流側（河口から約4km）の川底の採泥試験結果は下表のとおりでした。河口堰のある長良川の川底に約2mの層のヘドロが堆積している状況がよくわかります。

AM 10 :30	揖斐川	長良川
水深 m	5.6	3.9
状況など	砂	ヘドロにメタンガスの穴が多
状況など	シジミ 11 個	シジミ 1 個
酸化還元電位(ORP):mv	+115	-211

午後は、河口から約10kmの長良川－揖斐川の背割り堤において、同条件の「カニ採取」で両河川ヨシ原の環境比較をしました。揖斐川では130匹（ベンケイガニ雌60・雄51、クロベンケイガニ雌7・雄12）採取。一方長良川では1匹の姿も見えませんでした。数年前までかろうじて生き長らえた長良川のカニもついに死滅したようです。



揖斐川で採取したカニ

### 岐阜県要請行動

6月9日よみがえれ長良川実行委員会は、「長良川河口堰の開門調査の実施に向けた検討」など6項目からなる「長良川の環境改善を求める」要請を岐阜県に対して行いました。参加者は中川裕子県議含め11名でした。県側は、岩井聖河川課長はじめ6名が対応しました。昨年から実行委員会に参加した横越「遊水地」問題学習会の野津牧代表は、会が配布した住民向けチラシを提示して、地元自治会は国の説明に納得できず着工に同意して

いない状況などを訴えました。実行委員会の要請に応える事項はありませんでしたが、要請団の訴えを聴く姿勢は感じられました。

河口堰の開門調査  
国への働き掛けを  
市民団体、県に要請書  
長良川の環境改善を求め  
る二十の市民団体でつくる  
「よみがえれ長良川実行委  
員会」は9日、長良川河口  
堰の開門調査の検討を国に  
働き掛けるよう求める要請  
書を県に提出した。  
河口堰は、塩水の流入を  
防ぐために一九九五年から  
本格運用されている。実行  
委員会は河口堰の閉鎖で淡水と  
海水が混ざり合う汽水域が  
なくなり、環境や漁業に影  
響しているとして、試験的  
な開放を求めている。  
粕谷志郎共同代表が、県  
河川課の岩井聖課長に要請  
書を手渡した。実行委のメ  
ンバーは「開門して生態系  
を豊かにしてほしい」など  
と要望。岩井課長は「塩害  
が発生しない範囲で、弾力  
的な運用を要請する」と応

本ニュース37号では、特集として「徳山ダム導水路その2」を編集しました。皆さまから要望のあった「東濃と中濃の水道問題」（6ページ）や「徳山ダムと発電」（8ページ）を取り上げましたので、ぜひご覧ください。



実行委員会 撮影

2022/6/10  
中日新聞

した。  
実行委はほかに、徳山ダ  
ムの水を長良川に流す木曾  
川水系連絡導水路や、美濃  
市横越地区の遊水地計画な  
どの中止を求めた。  
(長屋文太)

# 特集 徳山ダム導水路

## 愛知県民、名古屋市民の私が願うこと

長良川市民学習会 田中万寿

### なぜ長良川へ：環境改善になる？

私は岐阜を離れ愛知県民になってからの年月が長くなりましたが、2007年に徳山ダムの水を長良川へ流し、それを再び木曾川へ戻すという「木曾川水系連絡導水路分割案」を知った時、この計画が実施されたら河口堰は永久に開門されず長良川は取り返しのつかない状況になる。愛知県や名古屋市が利用する水のために生まれ育った故郷の大切な川をこれ以上犠牲にしてほしくないと強く思いました。

当初、愛知県と名古屋市から「長良川河口堰の水を取水できる施設がほしい。木曾川下流の導水路を兼用の施設として使いたい」という強い要望が出されたといえます。導水先の木曾川には名古屋市の工業用水の取水施設である木曾川大堰（馬飼頭首工）があります。導水路が完成されると、揖斐・長良・木曾の三川が水路で繋がります。立案者は水を自由にやりくりでき合理的で効率的だと考えたのかもしれませんが、この案が実施されれば、広大な貯水池のようにになっている今の長良川の状態がずっと続くことになります。川に棲む生き物、川が育んできた歴史や文化、産業、人々の生活への配慮が欠けているとしか私には思われません。

分割案の目的は、長良川中流部の河川維持流量を増やし、渇水時のアユなどの産卵や木曾川下流部のヤマトシジミの生息環境を改善するためと説明されています。これに対して様々な分野の専門家や漁師さんなどから119項目もの質問が出されました。岐阜県はそれを国に送ったようですが、国からの回答は今も市民には知らされていません。

\*岐阜県のホームページ <https://www.pref.gifu.lg.jp/uploaded/attachment/1300.pdf> を参照。

木曾川水系連絡導水路、環境影響検討について：「平成20年11月26日国交省および水資源機構に対し提出した回答」「添付した意見一覧」

岐阜市内から羽島市にかけての産卵場で孵化したアユの多くは、河口堰によって水の流れが遅くなっているため海まで辿りつけず死滅し、それが天然遡上の個体の減少の大きな要因となっているのではないかとされています。他にも木曾川への導水で孵化したアユが吸引される恐れはないのか、長良川下流部の環境もさらに悪化するのではないかと素人ながら懸念します。ヤマトシジミに関しては、国内有数の産地であった長良川河口部は汽水域がなくなり壊滅状態です。ヤマトシジミを本当に大切に思うなら河口堰開門について真剣な検討をしてもらいたいと思います。

### 経費削減になる？：却下された愛知県民の訴え

導水路事業には2009年の凍結後も調査費などとして毎年2億円ほどの予算がつき、その額だけで既に10億円を超えています。徳山ダムの建設費は2004年には960億円増額され3500億円になり、愛知、岐阜、名古屋市は巨額

2007年(平成19年)8月23日 木曜日

**徳山ダム**

**3県1市 国と東海 長良川にも放流**

**導水路分割案で合意**

揖斐郡揖斐川町の徳山ダムためた水を木曾川に引く木曾川水系連絡導水路事業について、国土交通省中部地方整備局と東海三県一市（岐阜、愛知、三重県、名古屋市）は二十二日、名古屋市内で導水路合意を調印し、上流ルートに加え、下流で長良川と木曾川をつなぐルートを開通する「上流分割案」とする事で合意した。導水路事業は二〇〇八年平成二十年年度に建設が開始される見込みだ。

【関連記事30面】

二〇〇七年八月二十三日 「岐阜新聞」 抜粋

大山市境の木曾川に於ける、木曾川への導水路の建設は、長良川水系の導水路事業の一部を長良川へ由させ、三県一市でつくる徳山ダム一帯を軸に検討を進める上流分割案が上。上流分割案は、長良川から、この中で長良川中流部へ、流す。案では、毎秒二から五立方メートルの河川環境改善を図るために直接放流する想定だ。

の建設費を負担しています。最近、愛知県の豊川上流の設楽ダムの事業費が800億円増額され3200億円になると報じられています。加えて、将来長きにわたる維持管理などの大きな負担が待ち構えています。

導水路事業費890億円は国、愛知県、岐阜県、三重県、名古屋市の5者が負担します。岐阜、三重は治水費用のみ、名古屋市は利水費用のみを支払うに対して、愛知県は治水と利水費用を合わせて318億4千万円負担することになっています。そこで2009年に639人の県民でこの多額の公金の支出は違法ではないかと愛知県監査委員会へ監査請求をしましたが、却下されました。そのため私も原告に加わった愛知県民92名で「公金支出差し止め訴訟」を名古屋地裁に提訴しました。木曾川上流や熊本県の球磨川流域の出身者なども含む原告の誰もが、これ以上無駄な事業で環境を悪化させたくないとの思いでした。

最高裁判決まで7年かかった裁判は敗訴に終わりました。判決理由は「水源施設整備には長期間を要するから、長期的かつ先行的に整備する必要がある」という、原告の問いかけに応えない、河口堰や設楽ダム裁判と同じように被告の主張をなぞるものでした。27年前に完成した河口堰の水は、愛知県の水道用水として僅か16%が使われているだけで名古屋市では使われていません。裁判提訴直前の2009年5月には河村たかし名古屋市長による「名古屋市の水は足りているので導水路事業から撤退したい」という表明がありました。愛知、岐阜、三重各県の知事からは今までの経緯を無視した勝手な発言だと激しく反発されましたが、市長就任半年後の世論調査では市民の8割以上が、事業そのものが不必要と考え、その判断を支持すると報じられました（2009年10月20日中日新聞）。しかし残念なことに、その後の名古屋市の態度ははっきりしていません。

### 愛知県民、名古屋市民として

名古屋市と愛知県が使う水道水や農業・工業用水などの多くは、上流の岐阜、長野県に多くのダムや堰を造り取水しています。それに対して名古屋市は戦前からの既得権によりダムによらない川の自流水から取水することができ、1994年の大渇水の際も大きな影響を受けることもなく恵まれています。しかし木曾川流域の市や町の中には、後から造ったダムからの水を使うという水利権のルールのため、高い水道料金を払いながら断水被害にあった所がありました。渇水が解消されたのは農業団体が既得権のある水を譲ったからでした。

多くの研究者などに指摘されているように、今問われているのは、これまでに開発された水が公平かつ合理的に使われているかどうかだと思います。導水路などの新しい施設を造るのではなく、水を生み出す上流県に敬意を払い、流域の市町村や農業団体などと調整し譲り合い、水を大切に使う仕組みをつくることに国や関係する自治体は努力をしてもらいたいと思います。環境万博や生物多様性COP10を開催した県民多くの願いでもあると思います。

市民学習会では以下の書籍を扱っています。ご連絡くだされば郵送します。

- \* 水資源計画の欺瞞-木曾川水系導水路計画の問題点 著：伊藤達也 発行：ユニテ 1500円
- \* 徳山ダム導水路はいらない！ 著：近藤ゆり子 発行：風媒社 1000円
- \* やっぱり徳山ダム導水路はいらない -木曾川水系連絡導水路事業公金支出差し止め裁判報告- 著：導水路はいらない！愛知の会 500円

徳山ダム導水路関連施設と木曾川水系の水資源開発ダム



## 東濃と中濃の水道用水の現状と課題

富樫幸一（岐阜大学パート職員）

長良川河口堰と徳山ダム＝木曽川水系連絡導水路はよく大きな問題として取り上げてきている。徳山ダムには岐阜県の開発水量（2.6m<sup>3</sup>/s）が設定されていたが、地下水の豊富な西濃地域では市町村側はその必要性を認めていなかった。完成後、14年が経って、償還期間の23年の半分以上が過ぎてもまったく使われておらず、一般会計からの全くムダな支払が続いている。徳山ダムの住民訴訟で、当時、岐阜県は「東濃地域の湧水に役立つから」とまったく意味不明の説明をしていた。

県内市町村の水道料金と一般会計からの繰入の分析をしたが（自治研ぎふ、131号、2022年3月）、県営水道供給事業から給水を受けている東濃、中濃地域の家庭用料金は高く、かつそれは1970年代の当初から問題とされていたのである。

原因は、木曽川本流の水利権は、関西電力の発電用ダムや、下流の濃尾平野の農業用水が先行して持っていたからである。中津川の落合ダムから東濃用水は取水しているが、その下流では木曽川は段丘面を侵食して流れる。なお、阿木川は恵那市で合流するが、上流の中津川の落合ダムでの取水を下流で補給するかたちになっている。東濃西部の瑞浪・土岐・多治見を流れる土岐川（愛知県に入ると庄内川）は、窯業原料の採掘のために白濁していたので、飲料用に使えなかった。多治見や可児では当時、名古屋からの住宅団地の造成が続いており、増加する水道需要を満たすのはこの用水しかなかった。



岐阜県東部（東濃・可茂）の取水・送水の系統

愛知用水の最初の牧尾ダム（1961年、うち東濃用水は1.3m<sup>3</sup>/s）と、二期事業向けの阿木川ダム（1990年完成）と味噌川ダム（1994年）が続く。岐阜県は阿木川（4.0m<sup>3</sup>/s）では0.8m<sup>3</sup>/sのうち水利権は0.404m<sup>3</sup>/s分のみ、味噌川（4.3m<sup>3</sup>/s）でも0.3m<sup>3</sup>/s中の0.2m<sup>3</sup>/sしか使われていない。次の木曾川総合用水でもそうだが、愛知県、三重県で工業化や都市化が先行して河川自流やダムの需要が先行したのに対して、岐阜県も内陸工業化を目指してかなり多めの開発水量の確保を目指したが、実際にはそれほどの需要が起こらなかったためである。

1994年の渇水で、尾張東部と知多半島では時間断水が行われた、農業用水との調整が早くから行われていれば、その必要はなかった。また、名古屋市は木曾川自流の水利権も持っていたために、節水で対応できた。この時、東濃地域では60%の節水で、断水には至らなかった。その後は牧尾ダムの貯水量が減っても、阿木川・味噌川ダムとの統合運用が行なわれることになっている。「少雨化傾向」でもなくなってきて、節水化と人口減少傾向に入っているために「渇水対策」は問題となくなっている。

少し複雑だが、この余剰分をめぐって2004年のフルプランでは、木曾川中流の川合（可児市、飛騨川合流点の今渡ダムのすこし上流）で、落合との合計の中で0.1m<sup>3</sup>/sを上限として取水するかたちになった。岩屋ダム（飛騨川系の馬瀬川）の川合の分の0.4m<sup>3</sup>/sは0.3m<sup>3</sup>/s、白川は0.75m<sup>3</sup>/sのままとなる。木曾川と飛騨川で実際には流れは繋がっている。それを用水事業としてみると、東濃西部と中濃が送水幹線事業によって、緊急連絡管を兼用して接続されて（2013年）、東濃と可茂の両地域を統合して「岐阜東部用水供給事業」となっている（岐阜県水道企業課、地方公営企業）。

新しい県営水道ビジョンと経営戦略（2017～26年）で、今後の人口減少とコンパクト・シティ化、施設の老朽化・耐震化などに対して、取水の吐出量を20%減量するなどダウンサイジングを図っている。もちろん、徳山ダムの利水や渇水対策などの記載は存在しない。

供用開始年月	昭和48年4月	有収水量	52,240千m <sup>3</sup>	(平成27年度時点)	
計画給水人口	535,127人	(平成39年度時点)	現在給水人口	494,312人	(平成27年度時点)



岐阜県水道ビジョンより

# 徳山ダムと発電

徳山ダム建設中止を求める会 近藤ゆり子

中部電力では、水力発電を「再生可能エネルギー」に位置付けている。徳山ダムによる発電も。

徳山水力発電所 諸元 (中部電力HPから及び聞き取り)

	最大出力 (同時最大)	最大使用水量 (同時最大)	発電形式	有効落差	運転開始
1号機	139,000kW (164,000kW)	82.38m <sup>3</sup> /s (100.4m <sup>3</sup> /s)	ダム水路式	181.96m	2016年3月
2号機	25,000kW	18.97m <sup>3</sup> /s	ダム式	145.71m	2014年5月

1号機はピーク需要対応として発電し、2号機は徳山ダム直下流に必要な水を用いて常時発電しているのだそうだ。「中部電力はクリーンなエネルギーを確保する先見の明があった」のだろうか？化石燃料高騰の現在、燃料費が要らず、発電時にCO<sub>2</sub>を出さないのに、なぜ常時発電は2号機（最大出力 25,000Kw、「直下流に必要な水を用いて」なので、これより小さい場合がほとんど）に限るのか？

徳山ダムに係る水力発電計画の経緯を振り返ってみよう。

## 【コストが引き合わない発電】

徳山ダム構想が浮上したのは1957年。当時の起業者は電源開発株式会社。1958年3月に予備調査が始まったが、なかなか先に進まない。「コストが引き合わないとわかってきたから」と伝え聞く。他方、1961年に「水資源開発促進法」ができ、都市用水開発がダム建設の重要な目的となっていく。1965年、木曾川水系が水資源開発促進法に基づく指定水系となり、第1次木曾川フルプランが策定された。1971年には建設省が事業を承継して多目的ダムとしての調査を進め、さらに1976年に水資源開発公団が事業を承継した。徳山ダムは、正式に「水資源開発を主目的とするダム」になったのだ。

目的の一つに「発電」は残り続けたものの、発電専用容量はたった1140万m<sup>3</sup>。総貯水量の1.7%、有効貯水量の3%にすぎない。まるでオマケみたいなものである。とはいえ巨大ダムの高さ(161m)は発電には有利だ。単独事業では全く引き合わないが、他の目的で大きな(落差のある)ダムができるなら、それに「乗る」価値はあると考えたのだろう、電源開発は事業に参画し続けた。

## 【揚水発電としての徳山水力発電計画】

筆者が徳山ダムに関わり始めた1995年には、徳山発電所は40万kwを発電することになっていた。発電専用容量1140万m<sup>3</sup>では、たった8時間しか発電できない。それでも計画として成り立つのは、徳山ダムを上ダムとし、下ダム(杉原ダム)を中部電力が建設する揚水発電だったからだ。

揚水発電とは、日中の需要量の多いときに上ダムから水を落として発電し、夜間は余剰電力で下ダムの水を揚げて補給するものだ。エネルギー効率は極めて悪いのに、全国に揚水発電ダム計画があったのは、出力調整ができない原発の夜間の電力の捨て場を電力会社が必要としたからだ。当時、揖斐川上流に限っても、揚水発電ダム計画が他に2つあった。北陸電力の高倉揚水発電所(福井県今庄町に下ダム、高倉峠を越えて徳山ダムのさらに奥に上ダム)、関西電力の金居原発電所(滋賀県木之本町に下ダム、八草峠を越えた坂内村川上に上ダム)。しかし北陸電力の高倉揚水発電所は2001年に、関西電力の金居原揚水発電

徳山発電所・杉原発電所の諸元

項目	徳山発電所	杉原発電所	
		1号機	2号機
発電方式	ダム式(混合揚水)	ダム水路式	ダム式
最大出力	40万kw	1.8万kw	0.6万kw
最大使用水量	396m <sup>3</sup> /s	35m <sup>3</sup> /s	18.2m <sup>3</sup> /s
有効落差	121.2m	61.3m	40.0m
事業主体	電源開発(株)	中部電力(株)	

徳山ダム建設事業審議委員会資料より

所計画は2002年に、いずれも「イヌワシの生息・営巣」を表向きの理由として中止した。本当は、原発の新設が思うように進まないからやめたのだ。「原発の夜間電力の捨て場」であってこそ揚水発電の価値がある。他の電力で揚水をしたら、高くつきすぎて話にならない。この頃には中部電力も「杉原ダム計画地にイヌワシ・クマタカがいる」と言い始めた。芦浜原発建設が頓挫したので、揚水発電計画から手を引く、その準備だと感じた。

2003年、徳山ダム事業費大幅増額が大問題となり、徳山ダム計画は「見直し」が迫られた。

### 【徳山ダム事業費大幅増額、そして中部電力への事業主体変更】

1996年当時、電源開発は“特殊会社”であり、当時は完全に資源エネルギー庁の管理下にあった。国会議員のヒアリングに対して、担当の官僚は「コスト的に厳しい」と繰り返していた。ダム建設費の他に発電所の建設費が要る。発電全量を中部電力が買い取るとはいえ、市場価格からかけ離れた高値で押し付けることは難しい。

2003年、Jパワーと名称を変えた元電源開発にヒアリングをかけた。やはり「発電経済性の面から増額は受け入れがたい」との回答。建設省河川局は、「民営化といっても公的な責任はある（勝手に抜けれられない）。発電事業者の撤退ルールは作られていない（Cf:利水者の「撤退ルール」）」という。

結局、2004年のフルプラン改訂では、Jパワーは478億円→490億円と12億円の負担増額（増額分の1.25%）で乗り切った。中部電力は下ダム（杉原ダム）建設を中止し、徳山ダムの発電出力は15万3000kWに縮小し、普通の水力発電を行うことになった。起業地である藤橋村の村長は大いに怒り（発電出力の縮小は村に入るお金の縮小になってしまふ）、「補償をしろ！」と息巻いた。



工事中の徳山水力発電所。覆いの建物には手が着いておらず、地下の発電機2機の工事が見える。(2010.8.3 筆者撮影)

その騒ぎの余韻も冷めない2007年3月、完全民営化されたJパワーと中部電力は「徳山ダム完成後に事業主体をJパワーから中部電力に変更する」と発表した。「民間企業同士の契約なので、(ダム使用权譲渡の)金額は回答できない」とのこと。Jパワーはずっとコスト面で苦しんできた。“特殊会社”として税金が注入されてきたJパワーの負担分を、中部電力はまるまる補填したのだろうか？「中部電力は買い叩いたに違いない、何も知らない納税者が中部電力に貢がされた」と筆者は推測している。

### 【フルに発電できるのはたった30時間】

さて、最初に戻って「何故クリーンで燃料費が要らない徳山ダム水力発電所をフル稼働しないのか？」。フル稼働のときには毎秒100.4 m<sup>3</sup>の水を使う。発電専用容量1140万m<sup>3</sup>は30時間余で使い切ってしまう。仮に1日に6時間限定でフル稼働するとしても5日間で終わる。その間に雨が降っても集水域の狭い徳山ダムでは1140万m<sup>3</sup>以上の水が流入する保証は全くない。また、毎秒100 m<sup>3</sup>もの冷たいダムの水を流されたら、下流の生き物はたまったものではない。正常流量を補給するとして30 m<sup>3</sup>/sを流し続けて、下流の漁民、農民から猛反発を食らって運用を変えた、という過去の実績もある。

ダムに溜めた水での水力発電は、決してバラ色ではない。巨大なダム、巨額の投資。だが得られるものはわずかなし。

「発電」だけにフォーカスしても、やっぱり徳山ダムは「役立たず」なのだ。

## 長良川右岸に暮らして

長良川市民学習会 粕谷豊樹

私は岐阜市の長良川右岸で育ちました。小学校にプールの無い時代でしたから、夏休みは長良川の忠節橋の南側か長良橋上流の河原で過ごしました。

長じて地元企業に入社し、途中、岐阜を留守にしましたが40代後半に戻り30年近く現在まで暮らしています。会社は保守王国岐阜の典型的な組織で選挙になると保守党議員が現れて社員一同はお話を聞くのが慣例でした。長良川での思い出が記憶に残りその後も川には関心がありました。野田知佑の「日本の川を旅する」(新潮文庫)は忘れえぬ一冊です。

そのころからカヌーを買いたいと思っていましたが当時は事故も多く、まずは家族を養い子供をキチンと育てる事だと考え、そして転勤と仕事繁忙でつい買うことが出来ませんでした。今も心残りの一つです。



金華山を背景に、伝統の鵜舟の新造船

自由人になって十数年が経ちました。社会人時代に学んだことがあります。世の中は決して公正ではありません。自分で考えておかしいと思うことはダメと言わねばなりません。そうしないと他の人には解かりませんし物事は直りません。

「駄目なことはダメという 楽観もせず諦めず 雨雲の上はいつも青空」という下手な自作の歌が座右です。

自由になって「河口堰に反対し長良川を守る岐阜県民の会」に参加していた2007年の12月、年末最後の会合に、突然、現在の長良川市民学習会事務局長の武藤仁さんが飛び込んできて、木曾川水系連絡導水路計画があることを知らされました。

「長良川市民学習会」では揖斐と長良の両河川の水質を同時刻に調査して記録に残す事になりました。導水路の取水計画地点の水の採取を担当することになり毎月通った揖斐の谷ではいろいろな思い出があります。

赤い揖斐峡大橋を右岸に渡った橋下、水面近くの杉林と茶畑に囲まれた場所に而今庵という別荘があります。所有は愛知県の方で一年中、清掃がゆき届いていますがお会いしたのは一度きりでした。そこには12月初旬、恥じらう田舎娘の如く山茶花が咲き冬の訪れを感じます。その姿が実に愛らしいのです。毎年春までその花を観るのは静かな溪の朝の至福のひとつでした。



而今庵の山茶花

2018年 岐阜県では豚コレラが発生し全国に広がりました。冬、罟猟が禁止になったのを知って知らずか、橋近くの田んぼでイノシシが悠々と土を掘り起こしミミズを食べていました。



NEWS34号の「事務局から」でも書きましたが、揖斐の谷にはすでにもう一つの導水路があります。揖斐川町の高台にある北方地区では遥か下を流れる揖斐川の水は使えません。

大正時代に山一つ越えた横蔵寺の谷から流れる飛鳥川の水を間戸山の中腹を回って同地区に流す水路が作られました。この水路は老朽化が進み、平成に入って今度は迂回せずに山中の地下をトンネルで繋ぎ、農業用水を供給しています。その工事で、途中の地区では井戸が枯れるという弊害も出ました。新たな導水路計画では、十分な地質調査と両水路の位置関係など、国は地域住民に十分な説明をする必要があります。



飛鳥川用水標識



飛鳥川が西平ダム湖に合流  
揖斐峡大橋から見る

2009年の政権交代で凍結となった導水路事業は、中止となるのでしょうか？

いや、なりません！

国は動き出したいのですが口実とタイミングが見つからないだけです。有害、不要な土木事業が計画される要因は以下のような事が考えられます。

- (1) 公共事業を最大の景気浮揚策と考える保守政治が75年続いたこと。
- (2) 三権分立のうち司法が死んだこと。
- (3) 地方政治が機能せず、中央の下請けに甘んじていること（例：岐阜県河川課長と岐阜市の副市長は代々、国土交通省からの出向）。
- (4) 中央組織は誰も責任を取らず、一度決めたらやりきることが組織員の役目。

無関心、傍観、声を上げ続けられない事は賛成に等しいと彼らは思っています。ハチが集団でブンブンと飛んで近づく者を攻撃して巣を守る行為を私達は見習わなければなりません。これからが正念場です。

「よみがえれ長良川実行委員会」は毎年6月ごろ岐阜県に要請行動をしますが、当計画に否と云わない岐阜市、そして木曾川上流河川事務所にも定期的に撤回の要請をしなければなりません。

頭の上と耳元を常にハチがブンブンと飛ばせば彼らも市民の意識を感じます。

「長良川を守る岐阜県民の会」の毎年の国会への署名の提出と県議会への請願の努力に敬意を表します。

最後に政治と行政に影響を与える最大の力は一票を持つ市民の声です。その声を再び起こすには市民への再度の問題提起が必要です。ここで一つ提案をします。

【提案】 (1) 継続して地元紙に全面広告を出す。 (2) 費用はクラウドファンディングで寄付を募る。



長良川市民学習会では全国の皆様に NEWS（会報）を送り、心ある皆様のご協力を得てきました。ネットで全国の皆様にお知らせする事で駄目なことはダメという幅広い全国の皆様の心に届き、賛同のうねりが起こることを心より祈念をいたします。

政治を動かすのは一票の声です。その集まりです。

揖斐川の水は徳山ダムから出発します  
徳山ダムから下流を見る

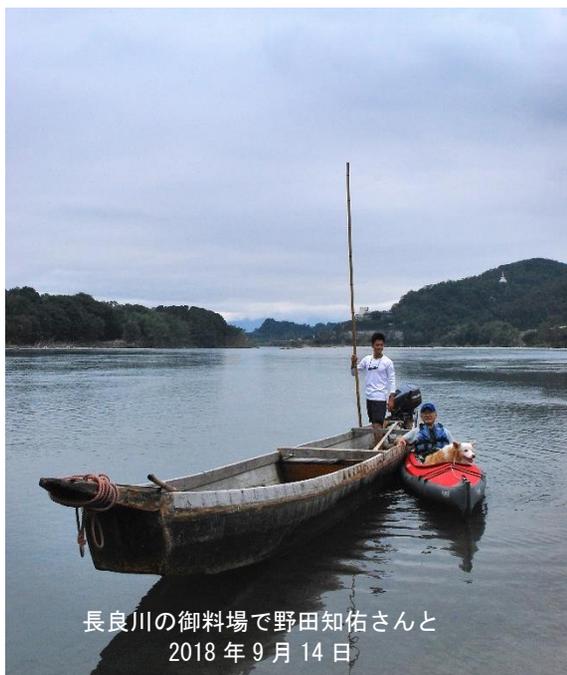
2022/1/31 筆者撮影

# 追悼 野田知佑 さん

長良川漁師 平工顕太郎

「長良川に生きる」2020年 野田夫妻から贈られた手ぬぐいにかかれていたのは野田さん直筆のメッセージでした。長良川と僕はいつも漁舟で結ばれています。ゆえに日々の暮らしは舟と共にあり、いつなんどき川で何が起こるのかわからない生活なので僕はこの町を離れることはできません。

カヌーひとつで日本の川を旅し、世界の川を旅してきた野田知佑さん。野田さんは、地球において川がもたらす本当の恵みを知る人だからこそ、現代人の川との関わり方や河川行政のあり方について、さらには日本の社会構造にまでも一石を投げ続けてこられたのだと思います。



長良川の御料場で野田知佑さんと  
2018年9月14日

30歳代の僕と、80歳代の野田知佑さん。年齢も異なれば、生きた時代も異なる両者です。岐阜長良川と徳島吉野川。活動拠点も仕事内容も異なります。それでも「川」で繋がった関係は令和まで15年以上にわたりました。とても失礼でお恥ずかしい話、「野田知佑」というネームバリューを知らなかった当時の僕は、大学で水産学を学んだ後に内水面漁業で貢献できる場所を探していました。

新卒1年目、故郷にその場所はなく、行き着いた先が四国三郎「吉野川」。野田さんが終の棲家として選んだ土地でした。「自由と責任は隣合わせだ！」と、川ガキ養成講座「川の学校」に集う小学生たちに向かって真剣な眼差しで語っていた野田さんの姿は目に焼き付いています。吉野川の中洲・善入寺島の夜は暗く、みなで焚き火を囲み、星空の下で野田さんのハーモニカ演奏が始まりました。そんな折、「安定した不自由を選ぶか、不安定な自由を選ぶか。」子どもたちへの問いかけに対し、居合わせた大人のほうが心を騒がせました。

吉野川を離れ、故郷の長良川で鶴匠代表に仕える鶴舟の船頭をしていると報告した時は、BE-PAL（小学館）創刊直後からの長寿連載「のんびり行こうぜ」に掲載をしてくださったり、2019年には野田さんの代名詞著書「日本の川を旅する」復刻版において巻末に小生の名前を記載していただくなど、とくに晩年は数々のお心遣いを頂戴いたしました。親方である鶴匠のもとを離れ、より厳しい川漁師の道を志す決意を固めたときは、お会いしたことも話をしたこともないライターから悪者のように取り扱われ中部地方ブロック紙に晒されました。彼曰く、鶴匠こそがこの川のトップリーダーであると。その悔しさは地元では受け入れられず、反対に岐阜の地域ブランドを損ねる恐れがあるという理由から口を封じられました。長良川のアユ漁解禁日の前日の出来事でした。

川漁師にとって最も神経を研ぎ澄まさなければいけない日に、心を掻き乱された腹立たしい記憶です。憤る気持ちを抑えきれず、感情そのままを野田さんに打ち明けました。野田さんは低い声で僕に言いました。「5年辛抱しろ。必ずお前の時代になる。」まるで未来が見えているかのように言葉をかけてくれました。その言葉に救われて今の自分があります。長良川河口堰と吉野川第十堰、明暗が分かれた事業に関わられた多くの市民たちは歳を重ね現役を引退していきます。しかし、その意思を受け継ぐ若い芽たちは、若い感性で新しい川の時代を開

こうと奮闘しています。かつて吉野川とともに過ごした川ガキたちは成長し、最近では結婚式によばれる機会も増えました。本年5月には野田さんと吉野川で再会できることを楽しみにしていた矢先の訃報。

川を切り売りする時代が終息し、生前に野田さんが求めていた本当の川が再び日本に戻るのなら、そのときはのんびり舟をうかべて長い旅にでてみたいです。日和佐のご自宅や、庭の池、敷地内を流れる小川でも遊ばせてもらいました。そんな野田さんの暮らしを追いかけるように僕も昨年、自宅に川が流れました。今年は庭に蛍が舞い、翡翠がやってきました。鮎が泳ぎ、アジメドジョウが越冬し、アブラボテが再生産できる素敵の水辺です。人に嫌われることよりも、地球に嫌われない人間になりたいと思えるようになりました。野田さんの想いはたくさんの方々に届いています。そして生きています。

長良川には僕がいます。川を愛する仲間もたくさんいます。だから大丈夫です。次の旅先が決まるまで、どうぞ安心してお眠りください。 平工顕太郎 拝



## パネル展 よみがえれ長良川のご案内

河口堰閉鎖(1995年7月6日)から **27** 年

長良川のこれまでと現在を見つめ、河口堰を開門し長良川をよみがえらせる道を考えるパネル展です。

**7月9日(土)~13日(木)**

(各日とも 10:00~19:00) **入場無料**

期間中 **伊藤孝司写真展** を開催します。

また同会場において7月10日(日)11:00~12:00  
伊藤孝司さんのお話「水俣・長良川からアジアへ」があります。

(会場での特別企画)

7月9日(土)pm2:00~4:00

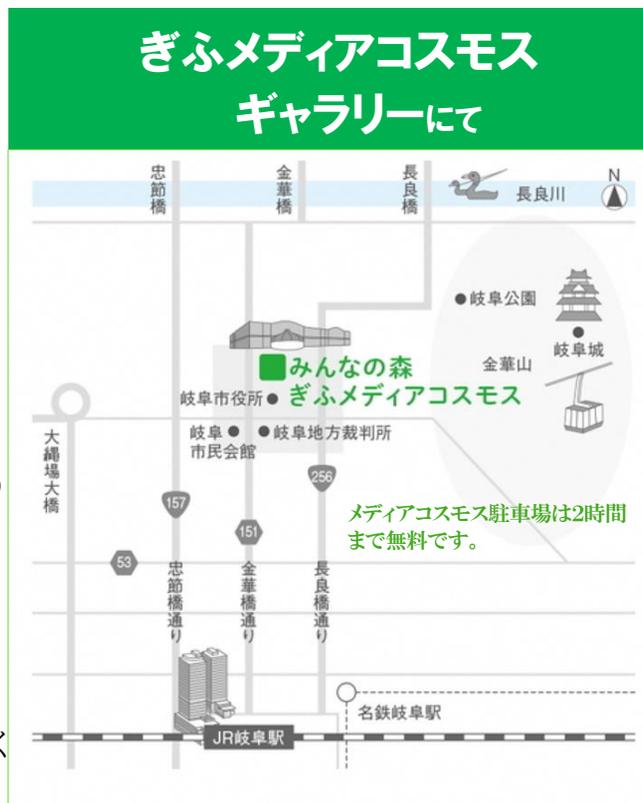
**増田康記(雑花塾)さんのミニコンサート**

「えほん長良川」をバックに、長良川(笠木透 作詞)を歌い語ります。お楽しみください。

7月10日(日)pm2:00~4:00

**平工顕太郎(川漁師)さんのトーク**

若き長良川漁師が「長良川のアユ」をわかりやすく語ります。ご期待ください。



## 寄せられたお便り・メールから

山室です。

ニュース 36 号を送ってくださり、ありがとうございます。また拙著「魚はなぜ減った」をご紹介くださり光栄です。拙著の内容から、特に「人への健康について一般向けに解説したもの」ですが、下記、私の HP から自由にダウンロードできますのでご覧ください。

[http://webpark1489.sakura.ne.jp/docs/profile/printing\\_work/sousetu.html](http://webpark1489.sakura.ne.jp/docs/profile/printing_work/sousetu.html)

今回のニュースでとりあげられていたりニア新幹線ですが、私は昨年度まで長野県の環境アセスメント委員をしていました。長野県では既に工事が始まっていますが、長野県ではアセス後も工事中の環境調査を報告させることにしています。

驚いたことに、JR 東海はトンネルを掘削した土砂置き場から出る水について、水質基準項目になっている亜鉛を測定しないで排出していました。亜鉛はサケマスなどに有害なので加えられた基準で、長野県の溪流河川では影響が大きいものです。

私はその点を追求したところ、「土壌調査項目になっていないから」の一点張り。「でも土壌を川に流すのではなく、土壌から出た水を流すのだから、適用されるべきは水質基準でしょう？」と再三質問しましたが全く取り合わず、最終的に「当社は排水に水質基準は当てはめません。」と堂々と宣言しました。

また鉄橋の工事について、河岸に土砂を移動したり橋げたが河岸にできるので、「それにより土砂が固定されて樹林化するのではないかと指摘したところ、彼等は河川関係の土木技術者がいなかったらしく、河道の固定化も樹林化も全く理解できず、事前にそのような視点での環境影響評価はしていませんでした。

JR 東海が水環境について全く専門的知識がないまま工事を進めていたことに愕然としました。

上記の JR 東海の回答は長野県技術評価委員会の議事録で公開されています。また下記ブログでリニア新幹線の問題を指摘しました。

<https://www.m-yamamuro.com/entry/2021/04/24/134827>

<https://www.m-yamamuro.com/entry/2020/07/08/125558>

数年前に父の実家がある多度に行きました。私が子供の頃は小山神社という式内神社の脇に湧水河川が流れていて、金魚すくいの金魚のようにハリヨがたくさんいました。その川が涸れていて、神社の上にあった森が山ご地ならしされて住宅街になっていました。森の中にあった先祖代々の墓も移設されていました。その足で多度神社まで行きましたが、神社の奥の森は全く変化がなく、神社には昔と同じ水量で川が流れていました。なぜ身近にたくさんいたハリヨが減ってしまったのか、一因は地下水の流れを考えずに行われてしまった住宅開発だと思いました。

長良川でのシジミとりだけでなく、ハリヨつかみも私の世代までの記憶にしかないのだと、本当に悲しくなりました。父親は実家の墓が移されるときに一度訪れていて、老後は実家近くにわけてもらえるはずだった土地に家を建てて住むのを楽しみにしていたのですが、帰ってくるなり「俺はもう二度と多度には行かない。」と激怒していました。今になって理由がわかりました（広大な土地を売ったのは、山室族の本家筋の地権者だったそうです）。せめて長良川が再び、ヨシ原と砂底だった昔のように戻ってほしいと思います。

東京大学大学院新領域創成科学研究科（理学系研究科地球惑星科学専攻）教授

山室 真澄

みなさま

「リニアを問う愛知市民ネット」の小林です。山室様にリニア問題に言及していただきありがとうございました。ご主張の内容に同意しつつ拝読させていただきました。

山室様のようなお方が県のアセスメント委員として関与されていることを頼もしく感じましたが、リニア・アセスメントの評価書に各県知事が意見書を提出して以降、工事がはじまった後も県環境審査委員会が機能しているのは、山梨、静岡、長野、岐阜だけです。東京、神奈川、愛知で機能していないのは、地上での工事が極めて限られているためようですが、中でも「リニア中央新幹線建設期成同盟会長」を排出している愛知県の態度はひどいもので、すべてJR東海任せです。そのJR東海に面談を求めると、日時の設定、時間、人数制限、事前に伝えられた質問にしか答えられないなど、まともな意見交換ができない状態です。JR東海の社員は会社員というよりも運輸官僚の末裔の感が強いです。

ご参考のために、愛知県行政のあり方を問題にした拙文を添付します。3月1日に春日井市の工事現場で発生した事故等についての愛知県の姿勢について触れたものです。

その後、拙文でふれたJR東海からの調査報告書が4月1日に愛知県知事に提出されたので、「県の組織として報告書の妥当性をどのように判断したのか」と問うたところ、報告書末尾に3名の有識者（朝倉俊弘・京大名誉教授、大島洋志・日本応用地質学会名誉委員、小山幸則・立命館大総合科学技術研究機構上席研究員）の意見が掲載されていることを信用して、受け取ったときに工事の再開を容認したとのことでした。しかも、対応したリニア事業推進室の正副室長が新任とあって、のれんに腕押しの様子を取りました。

JR東海、愛知県ともにこんな相手に何ができるのか考えあぐねているのが現状ですが、今後ともご教示、ご示唆をお願いいたします。

（小林収）

（添付文書）

県民にとって無きに等しい愛知県行政——リニア事故と土壌汚染に関して

春日井市西尾工区の「肌落ち」事故に厳格な対応を

昨秋以来、山間部のリニア新幹線工事での事故が相次いでいます。10月27日岐阜県中津川市（人命事故）、11月8日長野県豊丘村、3月1日愛知県春日井市、同月11日再び長野県豊丘村と立て続けです。重傷者を出した春日井市西尾工区での事故を知って、リニアを考える愛知県連絡会とリニアを問う愛知市民ネットは共同で、3月7日愛知県リニア事業推進室に、JR東海に対して工事の中止と徹底的な原因究明と再発防止を指導するように申し入れをしました。と言いますのは、中津川市での死亡事故に対しての、評価に値する岐阜県の対応を思い起こしたからです。

中津川市での事故について岐阜県は、①JR東海に対し、原因究明と安全対策についての調査報告書の提出を求め、②その報告書の検証を岐阜県環境評価審査委員会に求め、③さらに岐阜県リニア新幹線建設工事安全対策専門家会議を設置して検証を重ねて、④それらの検証を踏まえてJR東海に対して、2月25日に知事意見書を提示し、沿線住民の理解と納得が得られるまでは工事を再開しないことを求めたのです。

「少なくとも岐阜県と同等の行政対応をすべきだ」という趣旨の申入書を受け取った杉山推進室長は、「JR東海の原因調査報告を待ちたい。報告が文書なのか口頭なのかも分からないし」という全く主体性がない態度でした。

これまでも岐阜県はリニア工事で問題が発生した場合には環境評価審査委員会のテーマにして委員の意見を聴いてきましたが、愛知県（そして名古屋市）ではそうした行政対応が全くされず、名城非常口工事での湧水発生でもJR東海の説明を鵜呑みにするだけでした。

岐阜県の検査で汚染土壌検出

去る3月14日岐阜県環境管理課は、春日井市西尾工区から多治見市富士見町に搬入された工事発生土に基準を超えるヒ素、

ふっ素が検出されたと発表しました。同課に事情を尋ねたところ、「年1回の自主的な採取・検査で検出されたもので、汚染土は局所的に存在することがあるのでこの結果も考えられる。リニア工事のような大規模工事からの発生土が心配なので、土壌は年1回、水質は年2回の検査をしている」とのことで、従来の結果も県のホームページに掲載されていました。

残念ながら、わが愛知県の環境局がこうした動きをしたことは全くありません。それどころか、これまでの私たちとのやり取りでは、「土壌汚染対策法に関する権限は、政令指定都市である名古屋市と特例市である春日井市にそれぞれ委譲されているので、県としては口を出せない」と開き直る始末です。

県に対抗意識がある名古屋市はともかく、春日井市の環境行政が県の意向と関係なくされるとは考え難いですし、県内のリニア工事現場からの排出土は瀬戸市や三河湾、県内の公共的土地造成事業地に運ばれているのですから、県として無関係ではいられないはずです。

リニア新幹線に関する問題については、愛知県行政は県民にとって無きに等しい存在です。

## 5/21「長良川下流域環境観察会」参加者より

本日は誠にありがとうございました。

河口堰が生物に与える影響の大きさに、驚きと悲しみがありました。人間の都合で自然をいじくりまわすのは、やはり間違っていますね。考えさせられる1日でした。

本日の体験は、息子にも非常に重要な出来事になったと思います。ただ、楽しかっただけではなく、自然を大切にする心を、大きく成長して行って欲しいと思います。

ちなみに、よみがえれ長良川を知ったきっかけは、名古屋のバタゴニアで長良川市民学習会ニュースを拝見させていただきことでした。

今後ともよろしく願いいたします。

(真野匡美)



昨日は充実した時間をありがとうございました。

船から河口堰を見上げたとき、大仰な閘門を通るとき、とんでもないものを造り維持していることに改めて怒りを覚えました。

河口堰があることで誰も恩恵を受けていないのに存在し続ける、理不尽かつ不合理、土建国家の象徴の一つだと思いました。

(神田啓一)

## 事務局から

● 5月はサツキマス釣りのシーズンである。長良川沿いを車で走っているとよく釣り師を見かける。

そのサツキマスについて調査が行われ、結果報告が4月27日に長良川漁協から出た。

増殖のためのスモルト（銀毛アマゴ）放流はこれまでも河口堰で毎年約1万匹されてきたが、その効果を検証するための調査が行われていなかったため実施したとある。

具体的には2020年12月に河口堰の人工河川に脂（あぶら）ビレを切った銀毛アマゴ（シラメ）を約2万匹放流し、21年の春にサツキマスとしてどれだけ遡上してくるか調べる内容である。

報告書では木曾三川での採捕数や標識個体数やその割合などが記載されているが、結論としては、最後の皆さんへのお願いの所で「本年の調査結果に基づいて、近年のスモルト放流結果について結論を出すことは現時点でできない」となっていた。（詳しくは長良川漁協HPの「サツキマス増殖にかかるスモルト放流試験について」を読んでください。）

岐阜県の統計では1993年に32トンあったサツキマスの漁獲量は1995年の河口堰運用以降減り続け、スモルト放流をしながらも2018年には970キロまで激減してしまった。

河口堰ができればサツキマス漁がダメになると訴え河口堰建設に反対し、完成してからも開門を求めて闘い続け、2019年に亡くなった長良川漁師の故大橋亮一さんにこの報告書について感想を聞いてみたいと思った。（堀 敏弘）

● 私は以前、「事務局から」で、アパート5階の部屋から週2回歩いて昇り降りして、ゴミ出しをしていると書きました。私も年をとり去年は腰を痛めて辛い思いをしましたが、何とか頑張ってゆっくり昇り降りしました。書いてしまったので、「有言実行！」とやらなくては皆さんに嘘をつくことになる。そんな思いが支えになり今週も、65段の階段を上ったり降りたりしています。このところカラスがネットからゴミ袋を引っ張り出して、ゴミを散らかします。ペットボトルに水を入れてネットの端に重しとして置くのですがそれでもやられます。そのまま見過ごすとゴミはドンドン広がるので、回収車来るまでに降りて行っては掃除をしていますが、上ってくるうちに直ぐやられることもあります。そんな時は2回目の掃除に降ります。自分のゴミはその時持って降ります。ホントに腹が立ちますが、最近は諦めてカラスに老化防止の力を貰っているんだ・・・と思いながら昇降、そんな自分をアホかいな！とどやしながらの最近です。ハハハ(笑)さて いつまで・・・。（岡 久米子）

● 今年の長良川下流域環境観察会は定員いっぱいの参加。無事終了しホッとしているところです。

平工さんの原稿の中に吉野川という字が目に入り思い出しました。12年前、吉野川・第十堰建設反対運動のリーダーだった姫野雅義さんから突然「観察会に参加したいのですけど」と私の携帯に申し込みがありました。お名前はよく知っていたが全く面識がなかったのでびっくり。参加してもらえ！と舞い上がっていました。ところが、その約一週間後、「水源連総会」参加の流れで、北海道で泊まっていたホテルに、姫野さんが鮎釣り中事故死されたとの知らせが届きました。私たちは、ショックで眠れませんでした。長良川で姫野さんといろいろ語りたかったのに！今も悔しくて、悔しくてしょうがないです。観察会には、たくさんの思い出と毎年「新しい出会い」があります。（武藤仁）



「よみがえれ長良川」実行委員会の参加 30 団体を紹介しています。  
第 14 回は「自然の権利」基金さんです。

## 参加団体紹介 14

自然にも権利があります。「自然の権利」基金を応援して下さい。

弁護士 籠橋 隆明

1995 年、アマミノクロウサギなど奄美大島固有種 4 種を原告にした裁判が鹿児島地方裁判所に提訴されました。どうしたら野生生物が原告になれるのだろうと多くの人が不思議に思い、マスコミも様々な特集を組むなど大々的に取り上げ、社会的にも大きな注目を浴びました。今でも、この裁判は高校や大学の教材になっています。

動物原告という奇抜さもさることながら、私たちが主張した「自然の権利」が多くの人の共感を呼んだのです。文明の発達人間を傲慢にし、多くの自然が失われました。人も自然の一部であって、人は自然に対し謙虚でなければなりません。本当の科学は人が自然とともに生きていけるよう考えなければならないのですが、人間は長く真逆の方向に進んできたようです。自然の権利は人も自然も共に生きるために、人が自然を代弁して自然破壊を防止するという考え方です。

自然を代弁する裁判は資金が乏しく、十分な活動ができません。そこで、1996 年、自然保護訴訟を資金で応援する環境 NGO、「自然の権利」基金が設立されました。多くの人々の賛同を得て、今日までに 1 億 7000 万円集め、諫早湾訴訟、沖縄ジュゴン訴訟などいくつもの訴訟を応援しました。現在でも奄美大島嘉徳浜訴訟、北海道ラポロアイヌネイション訴訟など支援を続けています。

「ひとつの地球！ ともにある仲間たち！」、「自然の権利」に参加いただき支援をお願い致します。

「自然の権利」基金：<http://www.f-rn.org/index.html>



アマミノクロウサギ

## ご参加ください

●7月9日(土)～7月13日(水)パネル展「よみがえれ長良川 2022」ぎふメディアコスモス ギャラリーにて

7/9 (土) P m2:00～4:00 増田康記(雑花塾)さんのミニコンサート(パネル展会場内)にて

7/10 (日) A m11:00～12:00 写真家伊藤孝司さんの「お話」(パネル展会場内)にて

7/10 (日) P m2:00～4:00 長良川漁師平工顕太郎さんのトーク(パネル展会場内)にて

発行：長良川市民学習会 <http://dousui.org/>

代表：粕谷志郎

連絡先：武藤 仁／090-1284-1298

〒500-8211 岐阜市日野東 7-11-1

[mutohitoshi@yahoo.co.jp](mailto:mutohitoshi@yahoo.co.jp)



私たちの活動は皆様のカンパで成り立っています。  
賛同してくださる方は、ぜひカンパをお願いします。

ゆうちょ銀行口座：00840-3-158403

口座名称：長良川市民学習会

本ニュースのバックナンバーは <http://dousui.org/news/index.html> でご覧になれます。